

自己と社会を見つめ、自律できる生徒の育成

－自分自身と身近な地域社会の規範意識を考える活動を通して－

武豊町立武豊中学校 岩橋 雅高

1 はじめに

わたしは、規範意識を高める学校・家庭・地域の相互連携の在り方に関する研究の推進にあたって、在外教育施設勤務の経験を思い出した。平成 17 年度から 3 年間、ミャンマー連邦にあるヤンゴン日本人学校に勤務していたのだが、そこでの日常の中、ミャンマーの人たちは実に規範意識が高いことに気が付いたからである。街の治安もすこぶる良く、外務省「海外安全ホームページ安全の手引き」によると、「重要犯罪だけ見ても、ミャンマーは日本の 20 分の 1 程度（2006 年 10 月 1 日）」とある。この要因を考えてみると、彼らは、幼い時から「僧・親・師の教え（ルールやマナー）」を守り、それを他者に認められることで自信（自己肯定感）を得るとともに、それらをより広い集団の中で実践することのよさを実感していることがあるように思う。

昨年度は、ここから学校での教育活動の中で応用できるものを考え、規範意識の向上につながるように実践に取り組んできた。その実践から、以下のようなことが分かった。

- ・アンケートにより、自己肯定感が高い生徒ほど、規範意識が高い傾向があることが分かった。それを受けて、自己肯定感を高められるように、「心のノート」を活用して行ったリフレーミング活動や他者から自分のよさを伝えてもらう活動、そして生徒の良さを認める日記指導を行った。自己肯定感を高める一助になったと考えられる。
- ・アンケートにより、集団への所属意識が高い生徒ほど、その集団の中での規範意識が高い傾向が分かった。集団への所属意識向上のために行った「クラス全員での目標達成」や「日記を載せる学級通信」により、考えの共有ができる場になり、所属意識が高まった。



〈先生の話をきくときは腕を組む〉

2 研究の目的

規範意識に関する自己と社会の現状を知り、自己肯定感を高める活動や規範意識にかかわる学級活動や道徳の授業に取り組み、個々の規範意識向上を目指す。また、地域社会の規範意識を考える活動を通して地域社会への所属意識を高め、より広い集団での実践力育成を目指す。

3 研究の方法

(1) 学級の実態把握

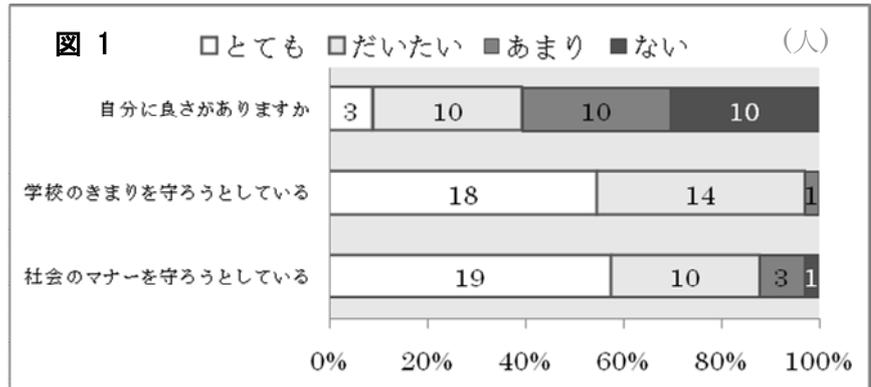
今年度の 4 月、現在担任している 1 年生 33 人に対して、自己肯定感と規範意識とのかかわりを探るアンケートを行った。その結果を基にして、何に焦点を絞って実践すれば、規範意識が高められるかを

考察した。アンケートの質問項目は、以下のようである。

あなたには、「良さ」がありますか。(選択肢)ある 少しはある あまりない ない
 学校のきまりを守るよう努力していますか。(選択肢)とても だいたい あまり ない
 ・その理由は何ですか。(記述)
 社会のマナーを守るよう努力していますか。(選択肢)とても だいたい あまり ない
 ・その理由は何ですか。(記述)

このアンケートの結果は、図1のようになった。

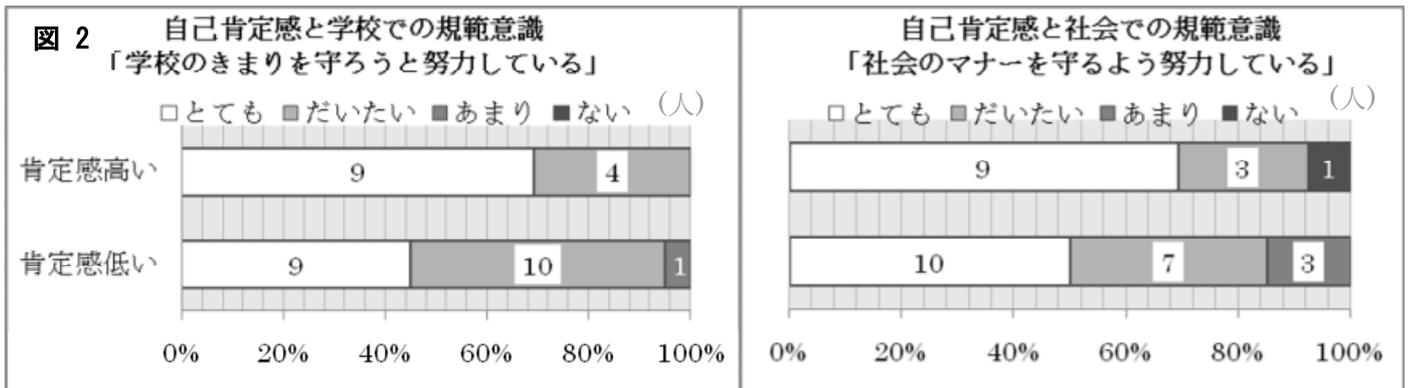
自分によさがあると感じている自己肯定感が高い生徒が少なく、40%に満たなかった。反面、規範意識は高くほとんどの生徒が守ろうとしていることが分かる。しかし、守ろうとしている理由には、「いい大人になるため」「良い生活を送れるようになるため」のように自己を向上させるためのものは少なく、「き



〈クラスアンケート結果 4月〉

まりだから」のように、守らなければいけないものと考えているものや「怒られる」「お母さんに迷惑をかける」「部活ができなくなる」など自己の利害にかかわるものが多かった。規範意識の基になる道徳的価値を考えるとすれば、全体的に低いものと考えられるのではないだろうか。

これを自分によさが「とても」ある、あるいは「だいたい」あると思っている生徒を「自己肯定感が高い」とし、それ以外を「自己肯定感が低い」として、「学校のきまりを守るよう努力している」「社会のマナーを守るよう努力している」の質問別にクロス集計してみると図2のようになった。



〈クラスアンケート結果 4月クロス集計〉

自己肯定感が高いグループは両方とも「とても努力」しているという割合が7割近くに達している。あまり努力していないという生徒は見られない。傾向として、自己肯定感が高いグループの方が規範意識も高い傾向があるといえる。

また、「学校」と「社会」で「あまり」と「ない」の合計数を比較すると、「学校」1人に対して「社会」4人と、「社会」の方が守る意識が低い生徒が多いことが分かる。狭い範囲での集団よりも広い範囲の集団の方が、ルールを守る意識が低くなる生徒がいるようである。

(2) 実践の内容

この結果を基にして、次の2つに焦点を絞って実践することにした。

ア 規範意識そのものを高めるための活動

自己の規範意識の状態を知り、規範意識にかかわりの深いと考えられる自己肯定感を高める活動を取り入れるとともに、道徳や学級活動で行動・判断の基準になる道徳的価値を高め、規範意識向上そのものを高める。

イ 規範意識を高くもつ範囲を広げるための活動

家庭や地域へのかかわりを実感できる活動を行い、より広い集団への所属意識を高め、高い規範意識で行動できる実践力を付ける。

4 研究の内容

(1) 規範意識そのものを高めるための活動

ア 規範意識を知り、現在の自分を考える活動

(ア) 「心のノート」を使った規範意識を知る授業

自己の規範意識を知るために、心のノート「自分だけがよければいい…」を使い授業を行った。

まず、規範意識と強い関連のある「公德心」について関連ページの絵を見て考えた。「公德心のない人」に続き、「公德心のある人」を見た経験を発表した。

その後、学校で気になる行動を発表するとともに、それに対して自分がどういう行動をとるか尋ねた。結果は表1の通りだった。



〈『心のノート』自分だけがよければいい…のページ〉

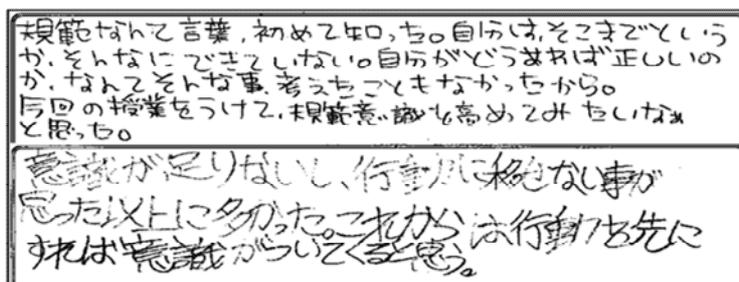
表 1

気になる行動 (単位 人)	必ず行う	自信がない	行わない	
トイレの下駄をそろえる	1 8	1 5	0	落ちているごみを拾う「自信がない」の理由 ・急いでいるときは分からない ・ひとりしていると拾うけど、友達といると拾わないかも ・面倒くさいと思うことが多いから ・なんだかいい子ぶっているとと思われるのが嫌だから
正しい服装をする	1 6	1 7	0	
借りたものを早く返す	1 5	1 8	0	
机・ロッカーの整頓をする	1 5	1 3	5	
静かにする場面で静かにする	1 4	1 4	5	
落ちているごみを拾う	5	2 2	6	
消しゴムのかすを床に捨てない	2	6	2 5	

そして、自分の判断や行動を決めるものを規範といい、規範意識が高いと正しい行動・あるべき行動がとれると考えられることを伝えた。授業後の生徒の感想には、次のようなものがあった。

規範意識という概念を知り、それを高めることが、あるべき行動につながると理解できたのではないだろうか。

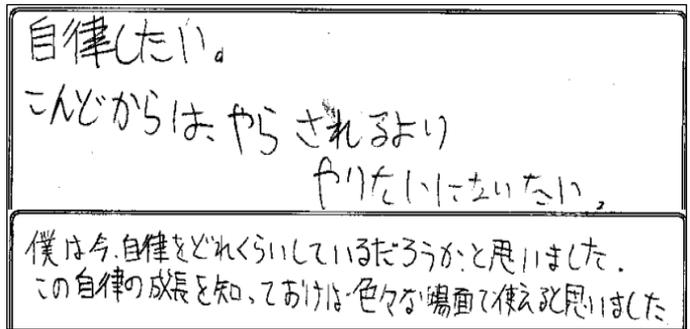
今の自分のどういうところを変えていったらいいか考えているようだった。



〈生徒の感想〉

(イ) 「心のノート」を使った規範意識のレベルを考える授業

また、規範意識の向上を自分自身でとらえやすくするために「他律・社会律・自律」を理解させる活動をした。まず、掃除を例えにして、自分は「なぜ掃除をしているか」を考えさせた。掃除をしている行動は変わらなくても、掃除をしている理由が「しかられるから」「班のメンバーに文句を言われるから」「掃除をする時間だから」「やった方が得する感じがするから」「きれいにしたいから」などによって、規範意識の高さが変わってくることを伝えた。



〈生徒の感想〉

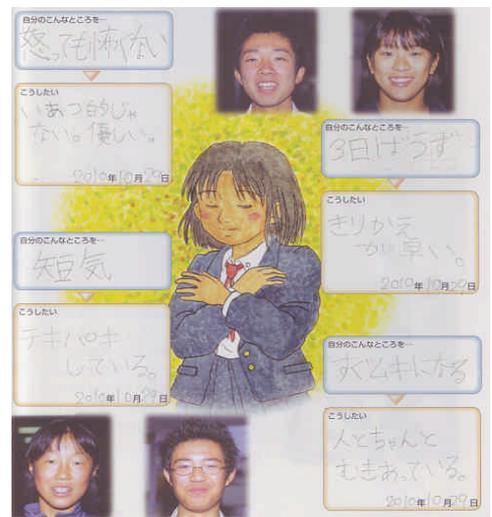
イ 自己肯定感を高める活動

(ア) 「心のノート」を使ったリフレーミングの授業

自己肯定感を高めるために、自己否定している部分を自己肯定できる部分に変える考え方(リフレーミング)を伝える道徳の実践をした。

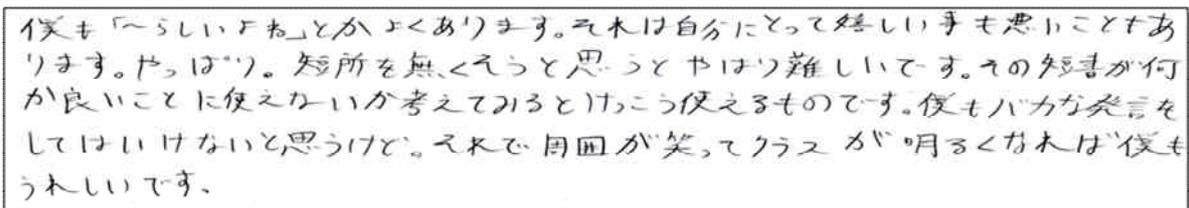
リフレーミングとは、ある枠組みでとらえられている物事の枠組みをはずして、違う枠組みで見ることを指す。同じ物事でも、人によって見方や感じ方が異なり、ある角度で見たら長所になり、また短所にもなる。

導入にリフレーミング辞典から例をいくつか紹介した後、「心のノート」の「あなたらしさがあなたの個性」を使い、「自分のこんなところをこうしたい」ことを考えさせた。生徒は、「三日坊主」を「切り替えが早い」というよさにしたいという意見や「すぐむきになる」を「人とちゃんと向き合っている」というよさにしたいなどの意見が出された。



〈『心のノート』あなたらしさがあなたの個性〉

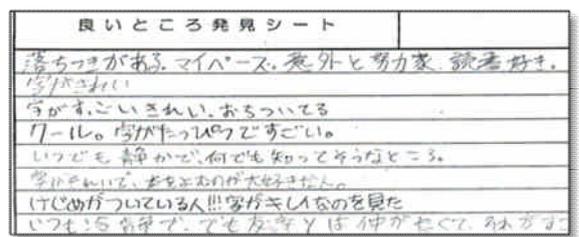
これにより自分の中の否定的な部分を減らすことから自己肯定感を高めるきっかけになったのではないだろうか。授業後の感想には、以下のようなものがあった。



〈リフレーミング後の生徒感想〉

(イ) 自己肯定感を高める「良いところ発見シート」

また、自分自身のよさをクラスの生徒全員に書いてもらい、自己肯定感につなげる活動を行った。導入に「心のノート」の「発見！友達のよさ」を使い、友達のよさを書いてそれを発表してもらった。その後、クラス全員のよさを書くことを伝え、「良いところ発見シート」をつかって、全員のよさを一行ずつ書いた。



〈良いところ発見シート〉

集中力を切らすことなく、クラスメイトのよさを書くことができた。人のよさを探すということは、それだけで自分自身にもよい影響があるようである。ほとんどの子が集中してよい表情で書いていたことが印象的であった。

この日の日記にクラスの半分以上の生徒が「良いところ発見シート」について書いており、その日記の内容から自己肯定感が強くなったことを感じた。

また、この後、欠席した給食当番の代わりを進んでしてあげた生徒に気付いて日記に書いてきたり、日直の忘れられていた仕事をしてあげていた生徒のことを教師に報告したりすることが多くなった。意識が人の良いところに向けられており、それを認めてくれる仲間がいる場所として、学級への所属意識も高まったのではないだろうか。



「良いところ発見シート」後の生徒の日記

これをきっかけにして、帰りの会でその日に見付けた友達の良い行いを紹介する時間をつくった。普段、大人しく目立たない子も、その行いをこの時間にたくさん紹介してもらっており、うれしそうにしている姿が印象的である。

(ウ) 教師に認められていることを知る毎日の日記指導

学年当初から、毎日全員の日記(知多地方には、「若あゆ日記」という日記帳があり、每学期生徒全員に配布される)を読み、コメントを返すことを続けている。

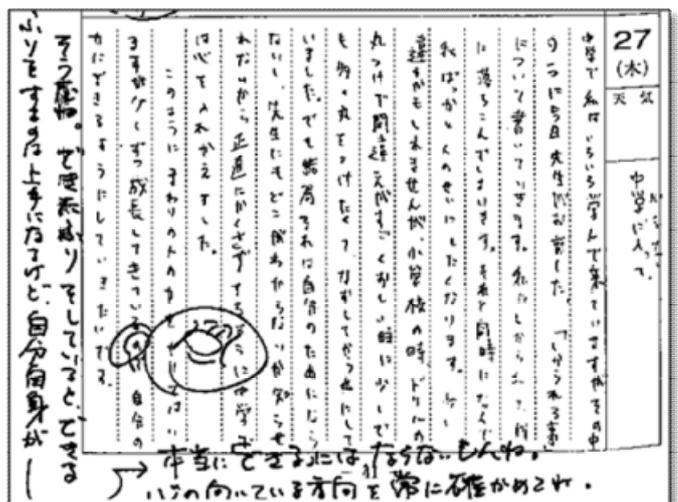
学級全員の生徒と毎日必ず言葉のやり取りをすることができ、その時々一人一人の考えを知ることができる。その中で、生徒のよさ、良い考え方を認め、自己肯定感に結び付ける言葉を書くように意識している。毎日続けることで、一人一人にあった考え方を伝えられ、日常の会話だけでは伝えられない生徒のよさも伝えられる。自分からなかなか教師に話し掛けられない生徒も、日記帳の中で次第に心を開き、心の葛藤を書くことができるようになる。その中で、良い考え方を伝えられる場になっている。

ウ 規範意識の基となる道徳的価値向上のための活動

普段の道徳の授業に加え、朝の会で、規範意識にかかわる事例を紹介して、生徒に考えさせる時間を取るようにした。

長浜市立浅井中学校のギネス記録への挑戦で、270人271脚に挑戦した後、正直に紐がほどけたことを申し出たニュースなど、全国的に報道されたものから、教師の学生時代やチャンマーでの体験談、校内での出来事などの話をした。日記の中に、その感想が出てくることもあり、自分自身に当てはめて考えられている。

右は、かつての経験から、しかられているのに逆切れする生徒について話をした日の生徒の日記である。



〈S Tの話の感想を書いた生徒の日記〉

(2) 規範意識を高くもつ範囲を広げるための活動

ア 規範意識を学校から家庭へ広げる

学校と家での規範意識の差を知るために、前述の「学校生活で気になる行動」と同じ項目を家庭で行っているかどうかを聞き、話し合いをした。この結果は、表2のようになった。

表2

気になる行動 (単位 人)	必ず行う		自信がない		行わない		・「正しい服装」 「静かにする」 については、調査せず。 ・トイレの下駄 については、2 人使っていないと いう返答。
	学校	家庭	学校	家庭	学校	家庭	
トイレの下駄をそろえる	1 8	1 0▼	1 5	1 4	0	7▼	
正しい服装をする	1 6		1 7		0		
借りたものを早く返す	1 5	6▼	1 8	2 6	0	1▼	
机・ロッカーの整頓をする	1 5	8▼	1 3	1 7	5	8▼	
静かにする場面で静かにする	1 4		1 4		5		
落ちているごみを拾う	5	4▼	2 2	2 1	6	8▼	
消しゴムのかすを床に捨てない	2	8△	6	1 3	2 5	1 2△	

「必ず行う」については、家庭での人数が増えた場合に「△」、減った場合に「▼」、
「行わない」については、家庭での人数が増えた場合に「▼」、減った場合に「△」をつけた。

この結果から1項目を除いては、学校での行動よりも家庭での行動の方が規範意識の低い状態であることが分かる。

その後、この結果から、「なぜ家では、規範意識が低くなるだろうか」について、意見を出し合った。生徒の意見には、以下のようなものがあった。

家だとしかられない。親もそうしているから。家族だから、やらなくてもいい。お母さんが掃除してくれる。トイレのスリッパが逆向きでも、みんな逆を向いて履いているからいい。借りていても、家の中にあるから、勝手に持っていけるから。気を使わないのが、家族のよさだから。何も言われなから、甘えている。

次に、「消しゴムのかすを床に捨てない」だけが、家の方がよくできている理由を考え、意見を出し合った。生徒の意見には、以下のようなものがあった。

自分の部屋が汚れると嫌だから。じゅうたんに、かすは落としにくい。学校だとしかられないけど、家だと親にしかられるから。床は、上靴をはいているから、外のような気がする。床には、座ったり、寝そべったりしないけど、家の机の周りでは、そうするかもしれないから。毎日掃除するから。自分の場所じゃないような気がしている。

最後に、どうしていくと「自律」になるかを話し合った。「家でも、学校でも、叱られるからやるのではなく、先のことを考えてやればよい」という結論になった。

この話し合いで、「消しゴムのかすを床に捨てない」だけ、家と学校の結果が他の項目と違ったのは、「自分の領域」という観点で考えれば、学校では自分の机が自分の領域であり、家では自分の机だけではなく、その部屋や家全体が自分の領域という意識の差が要因かもしれない。

言語活動の中で、生徒自身の中にある行動の判断基準が変化したように感じる。学校と家では「別もの」という意識が強かったようだが、自身の成長のためにその意識自体に目を向け、家での行動を考えるようになった生徒が出てきた。

イ 規範意識を学校から地域社会へつなげる
総合的な学習の時間「わが町武豊を知る」において、「わたしたちの町『武豊』～幸福度を知る～」をテーマに調査活動を行った(次頁に活動内容)。

幸福である要素として「施設の充実」「交通の便」「自然環境」などとともに「マナー」や「犯罪率」など規範意識にかかわる内容を意図的に入れて調査した。生徒たちは交通ルールを守れているかを町の人々にインタビューしたり、マナー向上のために必要なことを考えたりして、他の調査結果とともに公開日に展示した。福祉の充実や町のイベントのほか、過去に武豊町で起きた事件や犯罪発生率などの展示を熱心に見てくださる姿を生徒たちも喜んでいた。

これらの展示を見ていただいた方に、武豊町の幸福度を100点満点で考えてもらい、随時平均値を表示していった。展示を見たり、生徒の説明を聞いたりしてじっくり考えてくれた方が多かった。結果は、平均値61だった。

それと同時に、生徒自身が考える幸福度向上のための方法を考え、見とてくださった方々にも同様に考えていただき、掲示した。「レジャー施設をつくる」「交流活動をする」などのほかに「ごみをポイ捨てしない」「犯罪をなくす」「交通ルールを守る」などの意見があった。

この活動後に行ったアンケートは、以下のような意見があった。

Q「武豊町の幸福度が61だったことについてどう思いますか」

意外に低かった。半分より上だったと考えれば、よい方に取れますが、もっとできることはたくさんあると思うので、ゴミ拾いや交通ルールを守るなど、自分自身も気を付けたいと思いました。まだまだだと思う。もっと人々が意識しなければと思う。一人一人が思いやりをもって、行動してほしい。いろんなキャンペーンなどをしてほしい。もっと幸福度が上がるように、武中から変えていきたいです。逆に、不幸が39だったと考えてみると、まだ足りないと思う。

Q「幸福度を上げるためにわたしたちにできることはどんなことだと思いますか」

お金をかけなくても人が変われば、幸福度が上がるので、歩くときの気を配りみんなで少しずついい街にしたい。自己や犯罪を少なくすれば、平和で過ごしやすい武豊町になればいいと思います。朝のあいさつ、身近なボランティアをする。思いやりをもって行動。町のイベントに積極的に参加する。人が交流する場を設ける。しっかりと町のルールを守ることを一人一人が意識する。一日一善。ちゃんとマナーを守る。お年寄りのために、何かすること。



〈調査のまとめ〉



〈幸福度向上のための方法〉

総合的な学習「武豊を知ろう」活動内容(15時間)

活動内容	生徒の様子
<p>テーマ決め(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・武豊について知っていることを発表 ・「武豊」についてウェビング ・学級としての調査テーマを話し合う ・共通のキーワードでテーマを絞る 	<ul style="list-style-type: none"> ・「みそ、たまりが有名」「武豊線は日本で3番目にできた鉄道」「浦島太郎の伝説がある」「小学校が4つある」などの意見が出た。 ・「老町田湿地」や武豊に生息する動植物の名前、衣浦港、地元の企業や特産品、過去の事件に広がった。 ・特産品や企業、自然、交通事故のことで調べたいという意見が多く出た。 ・前出のものは町の人の「幸せ」につながるという意見から、町の施設や自然、事故などを調べて「町の幸福度」を探りたいという意見に皆が賛成した。
<p>計画(2時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・班ごとに「幸福度」を考える資料にするために、何について調べるか話し合う ・具体的に個人と班で何をどのように調査するのか話し合う(校外学習2時間含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ・班での話し合いの結果、「武豊の事故」「武豊の施設」「武豊の自然」「武豊の交通状況」「武豊町のデータランキング」「武豊の福祉」のテーマになった。 ・インターネット、図書館のほか、街頭インタビューや交番での聞き取り調査、施設訪問、街で交通状況を調べるなどが意見としてあげられた。
<p>調査(7時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各自テーマにそって個人の調査活動に取り組む(3時間) ・班ごとに個人のレポートを見せ合い、班で何を調査するか、まとめにどう使っていくか話し合う(1時間) ・校外調査の活動計画を立てる(1時間) ・アポとり(班長) ・校外調査活動(2時間：時間割変更をして午後に時間帯を使って実施) 	<ul style="list-style-type: none"> ・まず個人レポートにまとめるので、やることがないという状態はなく、意欲的に取り組めた。 ・個人の調査結果があるので、話し合いが活発に行われた。班の調査でも、幸福度を計る目標があるので客観的な内容が増えた。 ・どこに行くと効果的な調査ができるか考えていた。 ・アポとりの方法を指導してあったが、臨機応変に対応できないことが多かった。 ・計画に沿って、意欲的に調査していた。
<p>まとめ(4時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調査内容を模造紙にまとめる 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査項目に関する安全度を信号で表現したり、具体的な数字を並べたりして、客観的な資料にすることができた。
学校祭でクラス展示	
<p>振り返り(1時間)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幸福度の結果について話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の一員という立場で、人の行動に目を向けて考えた意見が多くなった。

ウ 規範意識を学校からネット社会へ広げる

1年生の生徒とその保護者を対象に、携帯会社の方に講師を依頼して「携帯安全教室」を開いた。相手を傷つけてしまう可能性のあるチェーンメールや出会い系サイトおよびプロフにおいて実際に中学生をだます詐欺の手口などを教えてもらった。携帯電話の使用についても、規範意識を高くもっておかないと、知らずに相手にいやな思いをさせていたり、自分自身が犯罪に巻き込まれる可能性があると感じていたようだ。



【携帯安全教室の感想】
 けいたいとはとても怖いものという言いがけだけど、実際、自分がきちんと使っていればなんの問題もないと正直思いました。
 人の使い方によっては、怖いものに先なる。自分の使い方しだいでけいいたいを便利に思ったり怖いものに思ったりが変わるので気を付けることが大切だと思いました

〈相手を思いやる使い方が大切だと気付く〉

エ 他者とのかかわりに気付き、かかわりを強める活動

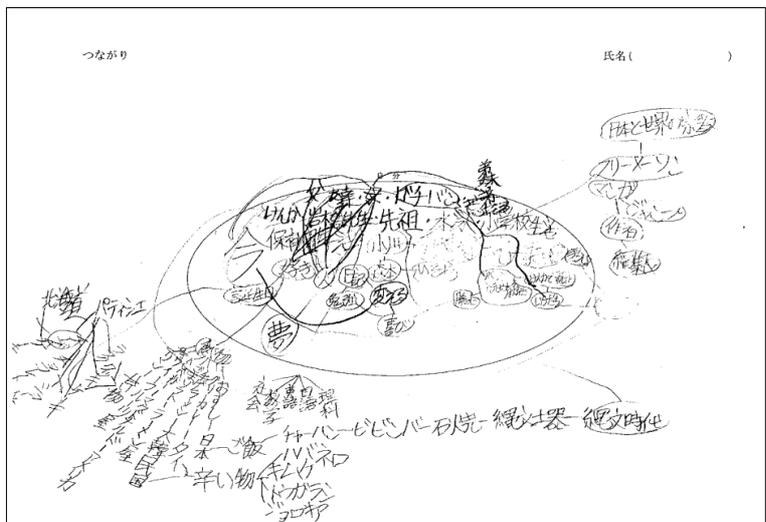
集団への所属意識を高めて「自分の領域」と感じる範囲を広げ、自分がいろいろな人に支えられていることを実感できるように、今の「自分」とかかわっている人たちを考える活動を行った。最初に、「知多武豊駅から隣の上ヶ駅まで電車に乗って移動することを可能にしてくれている人たちはだれですか」と問い掛け、発表させた。「本当にそれだけですか」と問い掛け直すと、次のような意見が出された。

運転士さん、車掌さん、駅員さん、切符の機械を作る人、線路の整備の人、線路作る人、電車をつくる人、シートをつくる人、電気をつくる人、時刻表をつくる人、電気を運ぶ人、発電の原料を取ってくる人、原料を運ぶ人、その入れ物をつくる人、切符の紙をつくる人、切符代を稼いでくれた親

このようにかかわってくれている人がどんどん広がっていった。自分が行う一つの行動に対して、多くの人がかかわっていることを実感していた。

その後、「では、今の自分がここにこうしていただけることにかかわってくれている人について考えてみよう」と話し、数人に意見を聞いてから、右のようなワークシートに取り組んだ。

真ん中の楕円の中には、今の自分の内面に関係あることを書き、外には直接ではないが今の自分がいられることに関係あることを書いた。それぞれ関係が深いものは、線で結ばせているいろいろなものがかかわっていることを感じられるようにした。中には、内面の全てが「親」と結びついていることを驚いている生徒やかかわりのあることがあまりに多すぎて驚いている生徒がいた。



〈「つながり」を実感するためのシート〉

生徒の「自分の領域」が広く、かつ鮮明になってきたのではないだろうか。

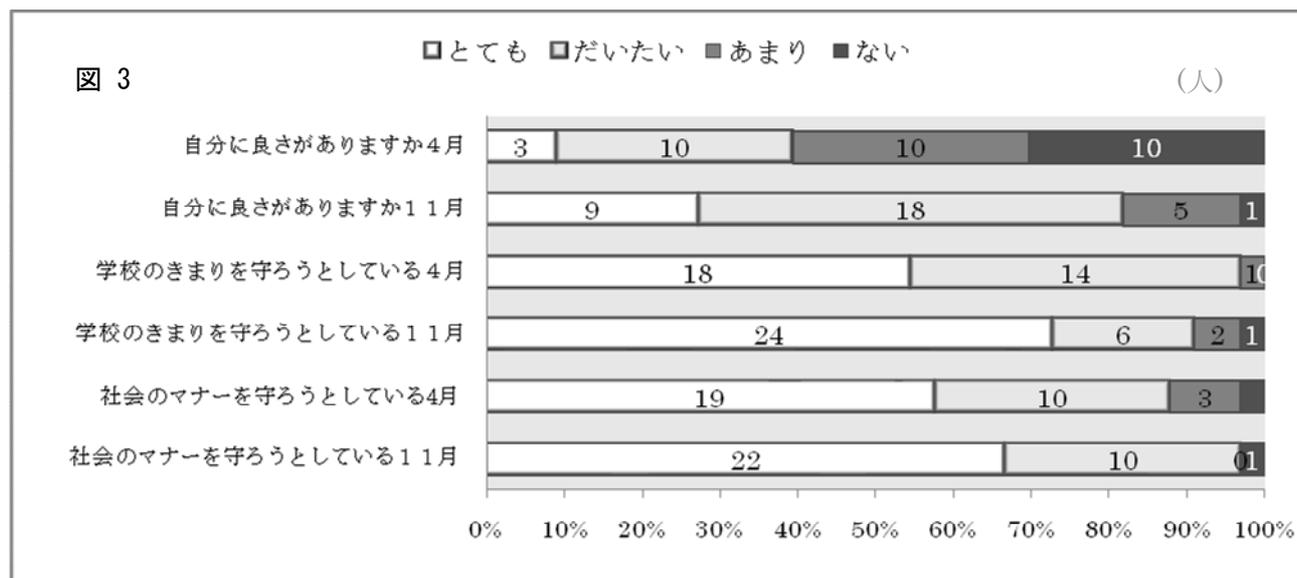
その日の日記には、以下のようなものがあった。

道徳でやった「つながりの紙」がすごく楽しかったです。わたしは、なかなか「自分」の枠の中に書くことがなくて、外ばかりに書いていました。でも、A君は親につながることをばかり書いて凄いなと思いました。Bさんの自分の中には、先生の名前がたくさんでした。まだ、今は全然「自分の中」が書けないけど、これからどんどん人とのかかわりを見つけて増やしていけるようにしたいです。それから、人に感謝の気持ちを忘れずに生きたいです。

また、数日後に、このシートを見直して日記を書いてきた生徒もいた。

今日、「つながり」の紙を久しぶりに見たときに、そこに「ありがとう」という言葉を書いた自分に気付いた。その時考えたのは、例えば一人の人に何かをしてもらって「ありがとう」と言っているのなら、その人を産んでくれた親やその前の親、それからずっと続く親以外の人にも関係する。なんか、自分たちが意識せずに使っている「ありがとう」という言葉は、その人以外にも関係する大切な言葉だと思った。これからは、一つ一つの「ありがとう」に心を込めて伝えたい。

5 成果と課題



〈アンケート結果 4月・11月の比較〉

4月に行ったアンケートと同じ項目で、11月に行ったアンケートの結果は図3のようになった。

「自分に良さがありますか」で自己肯定感の変化を見てみると、「とても」「だいたい」が13人だったが27人へと増加している。「とても」と答えている生徒は、9%から27.3%へ増加、「だいたい」と答えている生徒も30.3%から54.5%へ増加している。自己肯定感の向上については、一定の成果が見られる。半年間の学校生活の中で、中学生としてできることが増えたことや自己肯定感を高める活動の成果である。

「学校のきまり」については、「とても」の人数は増加したが、反面「あまり」「ない」の生徒が増えている。4月に「だいたい」と答えた生徒の半数が「とても」になったのだが、「あまり」と答えた生徒も2人いた。全体的には、向上していると捉えられるが、個々にみると中学校生活に慣れ、守る必要性よりも、面倒くささを優先してしまっている生徒もいることが分かる。

「社会のマナー」については、社会のマナーを「とても」守ろうとしている生徒が増え、学級全体で見れば、その規範意識の範囲も拡大したと言える。

「きまり」や「マナー」を守る理由については、自己の利害関係にかかわるものから、「マナーを守らないと、他の人に迷惑がかかるから」や「相手が嫌な思いをしてしまうから」「皆のためだから」という広い範囲を見るようになったと考えられるものが多くなった。これは、「自己」のとらえる範囲が、「自分だけ」あるいは「身内を含めた自分」から「自分にかかわる他人を含めた自己」へと大きくなったのではないだろうか。教室の床が自分とはかかわりのない場所から、自分とかかわりのある場所へと認識が変われば、ごみを捨てることはなくなるはずである。個人差はあるが、同様の変化がさまざまな活動の中から出てきているのだろう。

また、道徳の授業で「法の遵守・規則尊重」の内容を行ったとき、この取り組みがあったからこそ出てくる意見が多数あり、成果を感じられた。

今回の研究を通して、現代社会で子どもたちに規範意識の低下があるとすれば、それは「自分」と「他人」の間にある「自分にかかわりのある集団」が時代の流れとともに縮小していることが大きな要因であることが分かった。地域社会の中で、知った大人がたくさんいて、周りの人が良いことも悪いことも見ている声を掛けてくれる。こういう環境の中で育った子どもは、安心して自分とかかわりがあると思う範囲を広げていけるのではないだろうか。同時に規範意識についても家庭を中心とした、自己にかかわりの深い人々との生活の中で高めていくことができれば、規範意識の高い判断での行動を社会という広い範囲でも実践できるはずである。

学校は、規範意識の向上とともに、規範意識の対象を、家族や仲のいい友達という「甘えが効く集団」から、学級や学校そして地域社会という様々な人たちの集団、いわゆる甘えの効かない「世間」への橋渡しをしていく役割を担っている。

今後も、「学校」「身近な地域」から、より広い「社会」へ出ていく生徒たちが高い規範意識をもち、広い範囲で正しい行動ができること目標に教育活動に取り組んでいきたい。

6 おわりに

「はじめに」でも述べた、ミャンマーでの規範意識の高さは、こうした規範意識そのものを高めてくれる大人たち「僧・師・親」がはっきりと存在していることに加え、地域の人たちと協力し合って生活する「自分とかかわりのある集団」を認めやすい環境から生まれるものだろう。考えてみれば「僧」は、地域の尊敬の対象、「親」は家庭の尊敬の対象、「師」は学校の尊敬の対象である。それぞれにその規範の規準となる尊敬すべき大人がいるのである。

また、自己肯定感が規範意識の高さに関係が深いのは、自分を認めてくれていると感じる集団の中では、その集団内の人々に対して好意をもち、感謝の気持ちがもてるからであるように思う。そういった人々に対しては、自然に「皆のため」という思いが生じ、規範意識の向上につながるのではないだろうか。ミャンマーでは、地域の子どものという感覚が強く、本当に子どもをかわいがっていた。

家庭・地域・学校は、「無縁社会」といわれる現代日本の中でも、人と人との絆が自然にできるような状態に変わるべきであろう。三者全てが、別々にとらえられるのではなく、「人を育てる集団」となり、そこにいる大人がお互いを認め合い、規範の規準となるべく尊敬の対象になることを願っている。